

氏 名	田 尻 信 一
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学位記の番号	甲第 205 号
学位授与年月日	2017（平成 29）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	探究的世界史学習論の研究 －史資料を活用した歴史的思考力育成型授業の構築－
論文審査委員	主査 田部俊充 （教育学専攻 教授） 副査 今井康雄 （教育学専攻 教授） 副査 齋藤慶子 （教育学専攻 准教授） 副査 福井憲彦 （学習院大学 教授） 副査 森茂岳雄 （中央大学 教授）

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

研究の目的は、歴史意識と歴史的思考力を鍵概念として、史資料を活用した世界史学習内容の開発を通して、21 世紀社会に対応した探究的世界史学習の授業構成モデルを開発して提案することである。そして、これまでの歴史学習に根強い知識蓄積型・知識再生型学習の見直しを図るとともに、探究に基づく知識創造型・知識更新型学習の構築を目指すことである。

論文の構成は、序章・本論・終章から成る。本論は二部構成（第Ⅰ部・第Ⅱ部）である。まず、第Ⅰ部「歴史的思考力概念の変遷でたどる世界史学習の特質と課題」は四章構成（第 1 章～第 4 章）であり、研究の基礎的領域をなす。次に、第Ⅱ部「21 世紀社会に対応した歴史的思考力育成型授業の開発」は六章構成（第 5 章～第 10 章）であり、研究の中核的領域をなす。

まず、第Ⅰ部の四章（第 1 章～第 4 章）を整理する。第 1 章「世界史学習における歴史的思考力の全般的検討」では、戦後歴史教育における歴史的思考力の位置付けと役割を明らかにした。そして、戦後歴史教育の到達点（定説）として、歴史的思考力を「世界の構造や成り立ちを歴史的視野から考察する能力」としてとらえていることを明らかにした。地球化の進展や冷戦体制の崩壊によって、1990 年代以降、歴史的思考力の規定には、「世界の同時代性を認識する能力」や「史資料を分析・解釈する能力」などの考えが新たに登場したことを指摘した。その結果、今日では、歴史的思考力は重層的な構造と複合的な性格を有することになったと言える。そして、第 1 章を第Ⅰ部の他の各章（第 2、3、4 章）を読む際の道標として位置付けた。

第 2 章「学習指導要領世界史における歴史的思考力の位置付けと先行研究」と第

3章「戦後歴史教育の動向から見た歴史意識と歴史的思考力の系譜」では、戦後中等教育段階の歴史学習における歴史的思考力と歴史意識に着目して、歴代学習指導要領世界史の記述（第2章）と、歴史学や歴史教育の研究者や学校現場の歴史教師の言説や授業研究（第3章）を戦後歴史教育史に位置づけて整理した。そして、歴史的思考力とその上位概念である歴史意識の系譜をたどることを通じて、両概念を歴史的観点から分析した。その結果、歴代の学習指導要領世界史においては、歴史的思考力は現行学習指導要領に至るまで一貫して用いられて来た重要概念であるが、定義がほとんどなされて来なかったことを指摘できた。また、戦後歴史教育の動向においては、戦後歴史学、とくに史的唯物論の影響（社会構成体に基づく法則論的理解）を強く受けた。その結果、歴史的思考力は科学性と実在性が重視されるとともに歴史の発展や構造を理解していく力と見なされ、通史学習を円滑に進めるための役割が強く期待された。しかし、1980年代の「安井歴史教育論」、1990年代以降の加藤公明の「考える日本史」や、歴史の「全米指導基準」を始めとした欧米の歴史カリキュラムや学習論の紹介を通じて、歴史的思考力のとらえ方に新たな意味が付加された。そこでは、歴史的思考力を史資料の解釈や批判的吟味のためのスキルとしてとらえる見方が示されることになった。第2章と第3章における分析を通じて、学習指導要領での重要性が認識されながらも明確な定義化がなされて来なかった歴史的思考力の実態や、戦後歴史教育の動向の中で同概念が重層的な構造と複合的な性格を有することになった背景を明らかにすることができた。

第4章「現職教師への質問紙調査から見た歴史的思考力の現状」では、前述の2章（第2章と第3章）の分析を踏まえて、中等教育段階の社会科や地歴科、公民科の現職教師が歴史的思考力の定義や性格をどのようにとらえているか、また、授業作りの場で同概念をどのように位置付けているかを、質問紙調査によって明らかにした。この調査から、現職教師の歴史的思考力に対する認識の特徴として、歴史的思考力を「歴史の構造的理解」や「歴史的因果関係の把握」など、内容的要素を重視する伝統的なとらえ方が顕著であることが確認できた。反面、1990年以降着目されてきた「史資料を解釈したり発表したりする力」は比較的少数に留まった。歴史的思考力の新たな観点を学校現場にどのように啓発し定着させていくかが、重要課題となって来たことを明らかにした。

次に、第Ⅱ部の六章（第5章～第10章）を整理する。第5章「21世紀社会に対応した歴史的思考力育成型授業のためのカリキュラムのフレームワーク」では、21世紀社会に期待される資質・能力像として21世紀型能力を参照枠として検討した。そして、21世紀的学際テーマとして、多文化主義、グローバル意識、環境リテラシーに着目して授業構成モデルを開発し提示することが重要であることを提案した。そのため、カリキュラムを開発する際の「課題による組織」の観点として、グローバルイゼーション地球化の進展に関わる概念を取り入れた。また、カリキュラムのフレームワークの中に「改訂版ブルーム・タキソノミー」とルーブリックを取り入れることにした。アンダーソン（Anderson, L. W.）らが改良した「改訂版ブルーム・タキソノミー」は「教材や授業活動を設計する指針」であり、また「教育実践の成果を評価する規準」のことである。これは世界史の目標を世界史の知識（知識の次元／内容的局面）と歴史的思考の働き（認知過程の次元／行動的局面）にそれぞれ文節化するものであり、そこでの評価は教育目標に照らして分析的に行われることになる。

この結果、探究に対応した世界史の知識と歴史的思考の働きが可視化でき、探究と言う認知過程に対応した学習計画を立案したり学習を評価したりすることが可能になるなど、探究型の学習に対応したカリキュラム開発を行う上で有効な<sup>ツール</sup>道具としての効果が期待できる。反面、様々なタイプの知識が複雑に交錯する課題や生徒の活動や経験が多様である学習では、目標と評価を一体的に明確化・類型化するための道具である「改訂版ブルーム・タキソノミー」は有効に機能しない。このような学習においては、ループリックの作成とそれに基づく質的評価が効果的な評価指針となる。ループリックは「改訂版ブルーム・タキソノミー」と同様に評価の内容を可視化することができる。思考力育成型カリキュラムのフレームワークにおいては、学習の特性に応じて、「改訂版ブルーム・タキソノミー」<sup>ツール</sup>テーブルとループリックという二つの評価道具を使い分けて用いることを提案した。

第6章「世界史学習における史資料活用の意義と方法」では、世界史授業で効果的な史資料とは何かについて検討した。そして、探究を取り入れた世界史カリキュラムで有効に活用できる史資料として、考古学史資料と博物館史資料（共に非文献史資料＝「もの」）、図像史資料と地図史資料（共に準文献史資料）の活用を提案した。歴史学習での史資料と言え、これまでは文献史資料が中心であった。しかし、近年では、文献史資料に代わって非文献史資料と準文献史資料の活用が注目されて来た。これらの史資料は、生徒が五感を使って認識でき、史資料自体のもつリアリティや迫力を感じることができるという長所を有している。また、これらは、一次史資料であっても文献史資料と違い、専門的知識や技能がなくとも史資料へのアクセスが容易であり、学習者の発達段階に応じての分析や解釈ができるという特徴をもつ。その結果、これらの史資料を用いることで歴史を具体的に学習することが可能となり、歴史の学び方や調べ方を育むという学習効果が期待できる。

第7章から第10章までの四章において、四種類の史資料をそれぞれ活用した授業構成モデルの開発を行った。第7章「考古学史資料の活用による授業構成モデル」では、考古学史資料を用いた授業構成モデルを開発し提示した。考古学史資料として取り上げた新安沖沈船（1976年に韓国全羅南道で発見された沈没船）とその積み荷は、今日の研究では14世紀前半に中国の港を出帆し、その目的地が日本の博多であった交易船とその積み荷と考えられている。そして、積み荷として二万点に及ぶ中国製陶磁器、八百万枚の中国銭など大量の品物が引き揚げられている。「課題による組織」の観点として、グローバル・ヒストリーに着目した。グローバル・ヒストリーは伝統的な国家や民族の視点に代わって、大陸や海洋あるいは地球規模で捉えようとする視座と方法を提起するものであり、グローバル意識の涵養の面からも重要な概念である。生徒が考古学的史資料を分析し解釈していく思考の過程は、自然科学の学習での実験データや観察データを扱うのと同じような論理的思考や手続きが求められる。考古学史資料を読み解く過程は、21世紀型能力で示された批判的思考の過程と言えるものである。生徒に批判的思考の方法を体験させる上でも、考古学史資料の活用は効果的な学習であったことが確認できた。

第8章「博物館史資料の活用による授業構成モデル」では、博物館展示の人類学・民族学史資料を用いた授業構成モデルを開発し提示した。本章では、博物館展示の史資料として、国立民族学博物館（大阪府）のアメリカ展示とアフリカ展示を活用した授業構成モデルを提示した。「課題による組織」の観点として、異文化理解と

多文化理解に着目した。どちらも、今日の社会における文化の多様性や複合性に対応するための市民的リテラシーとして期待される資質・能力である。博物館史資料を用いた学習は「もの」が生み出す身体・感覚的な体験が大切であり、学校教育に期待される新しい学びのあり方を示すものであると言えよう。

第9章「図像史資料の活用による授業構成モデル」では、図像史資料を活用した授業構成モデルを開発し提示した。図像史資料として、19世紀に米国南部諸州が発行した紙幣に描かれたアフリカ系奴隷の図案を取り上げた。「課題による組織」の観点として、構築主義に着目してこれらの紙幣を読み解くことを目指した。南部諸州の紙幣に描かれたアフリカ系の姿は、今日、サンボステレオタイプと称されるもので、アフリカ系の「未開性」や「幼児性」を記号化したものであった。本章では、ステレオタイプ化したアフリカ系のイメージがどのように構築されたかのメカニズムを学習することで、生徒が巧妙に記号化された紙幣図案の問題性に気づくことを目指した。構築主義に基づく図像史資料の解説は、メディア・リテラシーに関わる能力を養う上で重要であることが確認できた。

第10章「地図史資料の活用による授業構成モデル」では、地図史資料を活用した授業構成モデルを開発し提示した。その際、「課題による組織」の観点として、感染症の歴史を取り上げた。今日、感染症は環境史に対する新しいとらえ方として着目されている。本章では、同時代性に着目して、地図上に諸地域世界の接触や交流などを表したり史資料と歴史地図（主題図）を一体的に活用したりして、そこから情報の読み取りなどの活動を計画した。この学習を通して、歴史情報と地理空間情報の総合的把握力を養うとともに、世界史を理解する上での地理的な見方・考え方の有用性についても認識させることができた。

最後に、研究の成果と課題を挙げる。先ず研究の成果として、第一に、探究という高次の認知過程を可視化したカリキュラムのフレームワークを構築できたことである。第二に、考古学史資料、博物館史資料、図像史資料、地図史資料などの多様な史資料を活用した思考力育成型授業を構想し、魅力的な単元を開発し提示できたことである。第三に、カリキュラムの開発においては、「課題による組織」として、グローバル・ヒストリー、異文化理解・多文化理解、構築主義、環境史の各視点を、それぞれの授業構成モデルに組み込むことで、世界史を学ぶ今日的意義を明確化できたことである。次に、今後の課題として、歴史的思考力という歴史科目固有の思考力を、21世紀を生き抜くための資質・能力として一般化していくことが重要である。そのためには、歴史的思考力の育成を、教科・科目横断的領域との関連性を念頭に置いて検討していくことが求められよう。

## 論文審査結果の要旨

### I 論文の概要

本論文の目的は、歴史意識と歴史的思考力を鍵概念として、史資料を活用した世界史学習方法の開発を通して、21世紀社会に対応した世界史の授業構成モデルを開発し、提案することである。そして、これまでの歴史学習に根強い知識蓄積型・知識再生型学習の見直しを図るとともに、探究に基づく知識創造型・知識更新型学習の構築を目指すことである。

本論文の構成は、序章・本論・終章からなる。本論は、二部構成（第Ⅰ部・第Ⅱ部）である。まず、第Ⅰ部は四章構成（第1章～第4章）であり、研究の基礎的領域をなす。次に、第Ⅱ部は六章構成（第5章～第10章）であり、研究の中核的領域をなす。

第Ⅰ部を以下に整理する。まず、第1章では、戦後歴史教育における歴史的思考力の全般的検討を行った。そして、歴史的思考力という概念は、「世界の構造や成り立ちを歴史的視野から考察する能力」として規定されていることを明らかにした。グローバリゼーションの進展に伴い、欧米諸国の歴史カリキュラムの紹介とその影響により、1990年代以降、歴史的思考力の規定には「世界の同時代性を認識する能力」や「史資料を分析・解釈する能力」などの考えが、新たに登場することになった。その結果、今日では、歴史的思考力という概念は、重層的な構造と複合的な性格を有するものになったことを指摘した。

次に、歴史意識と歴史的思考力について、第2章では歴代の学習指導要領世界史の記述を、第3章では歴史学、教科教育学（社会科教育・地理歴史教育）の研究者と歴史教師の言説や授業研究を、1945年から今日まで辿ることで歴史的観点からの分析を行った。その結果、戦後歴史教育の中で、これらの概念が重層的な構造と複合的な性格を有することになった経緯と背景を明らかにすることができた。

また、第4章では、前述の二章（第2章と第3章）の整理と分析を踏まえて、中等教育段階の社会科、地理歴史科、公民科の現職教師が歴史的思考力の定義や性格をどのように捉えているか、また、授業作りの場で同概念をどのように位置付けているかを、質問紙調査を行った。この調査から、現職教師の歴史的思考力に対する認識の特徴として、同概念を「歴史の構造的理解」や「歴史的因果関係の把握」と捉える伝統的な見方が顕著であること、また、1990年代以降着目されてきた「史資料を解釈したり発表したりする力」と捉える見方は少数に留まっていることが確認できた。

第Ⅱ部を以下に整理する。まず、第5章では、今日の世界における教育改革の動向と絡めて、新しい資質・能力モデルとしての21世紀型能力について検討した。21世紀型能力とは、知識を活用して「解」を求めたり新たな知識を創造したりす

るために有効な資質・能力モデルである。本研究では、21 世紀を生きる市民として育成すべき資質・能力とは何かを検討していく際に、21 世紀型能力を参照枠として位置付けて用いることにする。21 世紀社会を生きる上で不可欠な資質・能力として、グローバル意識や環境リテラシーなどに着目して、歴史的思考力を育むための授業構成モデルを開発して提案することが重要であると考え。また、開発した世界史カリキュラムを評価するための手立てとして、改訂版ブルーム・タキソノミーとルーブリックを作成し、併用することを提案する。改訂版ブルーム・タキソノミーでは、授業の教育目標を世界史の知識（知識の次元）と歴史的思考の働き（認知過程の次元）にそれぞれ分節化して表されることになり、そこでの評価は教育目標に照らして分析的に行われる。改訂版ブルーム・タキソノミーを用いることで、探究に対応した世界史の知識と歴史的思考の働きを対応させて可視化でき、探究という高次の認知過程に対応した学習計画を立案したり、学習を評価したりすることが可能になる。その結果、改訂版ブルーム・タキソノミーは、探究型の学習過程に対応したカリキュラム開発を行う上での有効な道具（ツール）として活用できた。反面、様々なタイプの知識が複雑に交錯する課題や生徒の活動や経験が多種多様である学習では、教育目標と評価を一体的に扱う改訂版ブルーム・タキソノミーは不向きである。この場合には、学習の成果物に照らしてルーブリックを作成し、それに基づく質的評価が有効な評価指針となりえる。ルーブリックは、改訂版ブルーム・タキソノミーと同様に評価の内容を可視化することができる。本研究では、実施した学習の特性に応じて、改訂版ブルーム・タキソノミーとルーブリックという二つの評価道具（ツール）を使い分けることで、探究という複雑な認知過程を可視化できる歴史的思考力育成型カリキュラムのフレームワークを提示することができた。そして、第7章以降の四章において、そのフレームワークを用いて授業構成モデルを開発して提案する。

次に、第6章では、世界史授業において、生徒の発達段階や実態に応じて効果的に活用できる史資料の形態として、非文献史資料（非文字史資料、「もの」）と準文献史資料（文献史資料と非文献史資料の中間的性格を有する。図像・地図・映像などが該当する）に着目する。そして、探究を取り入れた授業構成モデルで用いる史資料として、非文献史資料では考古学史資料と博物館史資料を、準文献史資料では図像史資料と地図史資料を取り上げる。

最後に、第7章から第10章までの四章において、上記の四種類の史資料をそれぞれ活用した授業構成モデルを検討する。第7章では、1976年に韓国南部の新安（シナン）沖で発見された沈没船とその引き揚げ物（海中遺物、考古学史資料）を取り上げる。「課題による組織」の観点として、グローバルヒストリーに着目する。考古学史資料の活用は、21 世紀型能力で示された批判的思考を体験させる上で効果的である。第8章では、国立民族学博物館（大阪府吹田市）のアメリカ展示・ア

フリカ展示（博物館史資料）を活用した授業構成モデルを提案する。「課題による組織」の観点として、多文化理解・異文化理解に着目する。博物館史資料を用いた学習は「もの」が生み出す身体的、感覚的な体験を可能とするものであり、学校教育に期待される新しい学びのあり方を示すものと言える。第9章では、19世紀の米国南部諸州で発行された紙幣に描かれたアフリカ系奴隷の図案（図像史資料）を取り上げる。「課題による組織」の観点として、構築主義に着目する。構築主義に基づく図像史資料の活用は、メディア・リテラシーに関わる能力を養う上で効果的な学習と言える。第10章では、14世紀における黒死病（ペスト）の世界的流行を題材に、歴史地図（主題図）を用いた授業構成モデルを提案する。「課題による組織」の観点として、環境史（感染症の歴史）に着目する。歴史地図の解読は、地理空間情報と歴史情報との関連性を総合的に評価し、歴史認識力を育む上で効果的な学習であると言える。

## II 審査結果報告

### 1. 総合所見

本研究は、探究的世界史学習を通じて、21世紀社会を生きる市民に必要な資質・能力の育成を目指すものである。本研究の成果として、改訂版ブルーム・タキソノミーとルーブリックを用いて探究という高次で複雑な認知過程を可視化した歴史的思考力育成型カリキュラムのフレームワークを構築し、それに基づいて、四種類の史資料をそれぞれ活用した世界史の授業構成モデルを開発して、提案することができた。そして、コンピテンシー・ベースという新しい視点に立った世界史カリキュラムを開発できたことは、高く評価できる。全国学会誌の査読誌7本が含まれる。

### 2. 評価すべき点

（1）多種多様な史資料の解釈を基本としたコンピテンシー・ベースの世界史カリキュラムの開発を行っている。今日のカリキュラム研究では、コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへと、関心がシフトしている。しかし、世界史学習論の研究においては、依然として、コンテンツ・ベースの内容開発が中心を占めている。このような状況の中で、本研究は、生徒による一次史資料を中心とした史資料の解釈や、学習成果の論述と発表などを取り入れた授業構成モデルを開発して提案できた。

（2）歴史意識と歴史的思考力のもつ重層的な構造と複合的な性格を、世界史の歴代学習指導要領、歴史学・教科教育学の研究者と歴史教師の言説や授業研究史を歴史的な観点から検討し、その特徴を解明している。そこでは、歴史的思考力は社会の発展や構造を理解する力と見なされ、通史学習を円滑に進めるための役割が期待されていたこと、また、グローバリゼーションの進展を背景に1990年代以降、歴

史的思考力には史資料の解釈や批判・吟味のためのスキルとして捉えるなど新たな考え方(歴史のリテラシーとみる考え方)が登場して来たことを指摘できた。また、現職教師への質問紙調査では、今日の教師の歴史的思考に対する意識には「歴史の構造的理解」「歴史の因果関係の把握」と捉える傾向が根強く、1990年代以降顕著になってきた歴史のリテラシーの観点は未だ希薄であることが分かった。本研究では、このような教師の意識を踏まえて、歴史的思考力育成型授業の検討と提案を行うことができた。

(3) 本研究は、教師や学校現場の実態を踏まえた世界史学習論を提案し、世界史学習の理論と実践の一体化を目指した研究である。本研究では、研究の鍵概念となる歴史意識と歴史的思考力を歴史的観点からの整理(歴代の学習指導要領、歴史学・教科教育学の研究者や歴史教師の言説、授業研究史)と、今日の中等教育段階における教師の意識や授業実態の把握を基礎にして、21世紀社会を生きる市民に求められる資質・能力論の観点から理論的に検討し、コンピテンシー・ベースに立った歴史的思考力育成型カリキュラムのフレームワークを構築できた。また、実際に授業で利用することを念頭に、四種類の史資料をそれぞれ活用した授業構成モデルを開発して提案している。

(4) 探究過程の可視化を目指した世界史カリキュラムのフレームワークを構築している。探究活動を対象としたこれまでの歴史授業研究が、学校現場に定着して来なかった理由として、探究という高次で複雑な認知過程をカリキュラムの中に確認するための手立てが乏しく、探究過程が授業者にも生徒にも確認し難い状況があった。本研究で開発した世界史カリキュラムのフレームワークでは、改訂版ブルー・タキシノミーとループリックを用いて、探究過程を可視化できたことである。

### 3. 課題とされる点

(1) 米国の初等中等教育段階の歴史教育では、K.C. パートンと L.S. レビスティックによる“Doing History”などの歴史授業改革が注目されており、本研究と同様の問題関心に基づく歴史カリキュラムが数多く開発され、提案されている。今後は、米国の歴史授業改革の動向を視野に入れて、研究の深化と広がりをはかる必要がある。

(2) 本研究の目的を達成するためには、開発した授業構成モデルを高校での世界史授業で実際に実施してみる必要がある。四種類の史資料をそれぞれ活用した授業構成モデルの有効性や問題点について、実際の授業において検証することが求められる。そのため、今後すみやかに、高校教師の協力を得て授業を実施していくことが望まれる。

### 4. 結論



以上の評価を踏まえて、審査委員は全員一致で、本論文が博士（教育学）を授与  
するに充分値するものと認められるとの結論に達した。